

□ブッソウゲという名の由来 History of Naming of "Bussoge"

牧野 日本植物図鑑に、ぶっさうげ（扶桑）について、「和名ハ漢名ノ一ナル佛桑ニ基キ之レニ花ヲ加エタモノナリ」と解説されている。牧野新日本植物図鑑（1961）及びその後の版（1989）には、「〔漢名〕扶桑，〔日本名〕漢名に花という文字を加えたもの，すなわち扶桑花の音讀みのなまり」と解説されている。中国では古くは朱槿の名で呼ばれ，扶桑，佛桑，福桑，赤槿，日及，照殿紅その他いくつかの異名があるが，佛桑は元来木槿，ムクゲの名が誤用されたものであり，日及もまた同じであるといわれる。明の王路の「花史左編」（1617）には佛桑花の名が用いられており，わが国では貝原益軒の「花譜」（1698）に佛桑花，また大和本草（1709）には佛桑花，フッセウケと仮名がつけられており，その際「花史左編」が引用されていることから，中国名の1つ佛桑花をそのまま日本名として用い，フッセウケ，ブッサウゲ，ブッソウゲと仮名使いが変化して今日に及んだものと考えられる。牧野富太郎博士の旧蔵書即ち高知市五台山縣立牧野植物園内牧野文庫には上記の文献が揃って所蔵されており，牧野博士はそれらに目を通して解説されたものと推測される。また雑誌「実地園芸」第24巻（1938）に，「ブッサウゲの和名は佛桑花から来たもの」と記されており，牧野 新日本植物図鑑改訂版の解説は原著の意を理解していないように思われる。なお中国では清の陳淏子の「秘伝花鏡」，同呉震方の「嶺南雜記」などに佛桑花の名が記されており，わが国では島田充房・小野蘭山の「花彙」（1765）に，照殿紅，一名佛桑花と記されており，また宮沢文吾の「花木園芸」（1940）には，「ブッサウゲ 名称 漢名の佛桑に基く和名である。所で支那の書籍で佛桑花と書いてあるのは花史左編である」と記されている。（常谷幸雄 Yukio Jotani）

□「植物標準名目録」について On "Lists of Plant Names in Current Use"

1993年に日本で第15回国際植物科学会議が開か

れる。その機会に，植物名（学名）についての画期的な事業が達成されようとしている。Lists of Plant Names in Current Use（仮に，表記のように意識しておく）が編集され，それに伴って必要となる国際植物命名規約の改訂が行なわれようというのである。

背景 国際植物命名規約は植物名を安定させることを目的としている。世界の共通語として学名が設定されたことは，生物学の進歩に大きく寄与することだった。しかし，一方では，ふつうの植物の学名が度々変更されることについての苦情も絶えない。安定させるはずの規約の条項に従って学名が変更されるような皮肉だつて現実に珍しいことではない。1つの規則で，植物のすべての群の学名を一律に確定させることなど，本来無理な注文なのかもしれない。

このところ，分類学以外の分野でも生物の名前を用いる機会が格段に広がってきた。今世紀の中葉から生命現象にみられる共通の原理に一途に解析の目を注いできた生物学が，ここへ来て，生物の多様性に強い関心をもつ傾向がでてきた。生物学のあらゆる分野が，多様な生物を扱かうことによって，個々の種属を標識する生物名に深く関わることになってきた。もう1つの傾向は，地球環境と潜在遺伝子資源に向けての社会的関心の高揚である。その結果，かつては分類学者だけが利用していた植物誌が，生物学に関わりのなかったひとにまで興味をもたれるようになってきた。しかし，専門家が専門家のために作っているものを誰でもが自在に活用できるというものではない。そこで，分類学に携わる者にはそれなりの言い分があることは承知しているが，安定しているはずの学名が始終変わるのが不便だという意見から，極端な場合には，参照する本によって，分類体系も違っており，使われている学名も異なるような分類学では使いものにならないではないか，という過激な発言さえとび出す始末である。一方，分類学者の立場からいえば，学名の利用者からの身勝手な注文に，分類学者が忙しい時間を割くことはないではないか，という意見だつてない訳ではないだろう。しかし，学名について最もよく知っているのは分類学者であり，それでもなくとも分類学